No,

コッコン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｎｏ，

【Ｎコード】
Ｎ８９９１Ｃ

【作者名】
コッコン

【あらすじ】
ある異世界、「ランカー」を目指す少年の物語

プロローグ

ここはこの世とは異なる世界
名は・・・「ラクーン」

「ラクーン」というこの世界には「ランカー」と呼ばれる者たちがいる。
ランカーとは、戦いにおいて優れたもの１００人に与えられるナンバーを持っているものだ。このナンバーは、戦いに敗れれば剥奪され、勝者はナンバーを受け継ぐのだ。
また、ナンバーが小さければ小さいほど強い力を意味する。
ラクーンでは、このランカーがすべての権力を握っている。だが、すべてのランカーが対等なわけではない。
１００あるナンバーでも、１～１０のナンバーを持つ者が実権を握っている。
長い歴史においても、１～１０のナンバーは持つ者は一度も変わらずに現在に至っている。
そのため、この１０人は十鬼将と呼ばれ、誰も挑まない、いや挑めないほどの強さを持っていたのだ。
そして、他のランカーはこの１０人に従い、この１０人がすべての権力を持つ者支配者として君臨していた。
しかし、このときランカーを夢見る一人の少年がいた。
後にこの少年が、ランカー最強と呼ばれる者となることは、まだだれも考えもしなかった。

プロローグ（後書き）

下手ですいません

1、いつもの日々

「アグル～」
誰かが僕の名を呼んでいる。
「アグル、無視するなよ。」
彼は少し怒ったように問いかけてくる。
彼は僕の幼馴染で名はマイル。結構短気だがそれを補うようにやさしさもある。
「ごめんマイル、ボーっとしていて。」
「ボーっとしているとは、お前にしては珍しいな。なんかあったのか？」
「別にないけど・・・」
僕は、幼き日の夢を思い出していた。まだ果たされていない夢。
「そういやお前ってランカー目指していたよな。まだ、あきらめてないだろ。」
彼は僕の心を見抜いたかのようにそう告げると、少し僕から離れさらにこう告げた。
「久々に組み手でもするか。」
「えっ・・・」
彼から予想しない言葉が発せられ少し驚いてしまった。
彼も、昔はランカーを目指していたのを僕は忘れていた。
「嫌か？」
「嫌じゃないけど何でいまさら？」
「いまさらって、俺もランカー目指しているからな。」
さらに思いがけない言葉に思わずきょとんとしてしまう。
「お～い、聴いているか～？」
「聴こえてる。お前はあきらめたとばっかり。」
「ん～まぁ、半分あきらめているのかもしれないけどな。」
彼は歯切れの悪い答えを告げた。

「じゃ、いくぞっ！！」
「なっ！！」
ドサッ！！
いきなり飛び掛られたので転んでしまった。
「おいおい、そんなのでランカー目指していたのか？」
「いきなり飛び掛るなんて、卑怯だろ！！」
「ワリイ、ワリイ」
彼は悪びれた素振りも見せずそう告げた。
僕が怒った素振りを見せると、彼はどこかへ走っていってしまった。
僕は「本当に騒がしい奴だな。」と心の中でつぶやいたのだった。

2、夢へ・・・

「アグルさん・・・アグルさん起きて」
「ん？・・・誰？」
時計を夜中の３：３４こんな時間に人を起こす人はいないはず。
「あなたは誰？」
起きて間もない目に映ったのは、僕と年も変わらないくらいの女性だった
「私は、あなたの父アーガス様に仕えていたものです。」
「父さんに！！」
父さんに仕えていたのならもうかなりの年のはずだ・・・
しかも、父さんは僕が生まれて一年もたたないうちに死んだ・・・
「はい・・・アーガス様は、あなたの素質を信じて居られました。」
「素質って何の？」
「戦いです。」
彼女は迷いなくそう言った。
「戦い！？」
「はい、アーガス様はランカーだったのは聞いていますか？」
「うん・・・母さんが亡くなる前に聞きました・・・」
そう、僕の父はランカーだった・・・ナンバーは６３・・・
「あなたにはアーガス様から受け継いだ権利があります。」
「権利？」
「あなたはアーガス様の息子、ランカーの息子です。」
「・・・はい」
「ランカーの子供には、親の持っていたナンバーへの挑戦が可能なのです。」
「挑戦！？」
普通ランカーに挑むためには、年に二回の武闘大会で優秀な成績を

残して、やっとナンバー１００への挑戦が認められる。
なのに武闘大会に出たこともない僕がランカーに挑戦するなんて・・・
・
「挑戦といっても、今のあなたでは負けるだけです。」
「は・・はい・・・」
「なのでこれから訓練を積みランカーに挑む準備をするのです。」
「訓練っていきなり言われても。」
「すぐにとは言いません、一ヶ月待ちます、それまでに心の準備をしておいてください。」
言い終わると同時に一瞬周りが眩しいくらいに明るくなった。
僕はとっさに目を閉じてしまった。
目を開けると、もう彼女はどこにもいなかった・・・・・・・

3、一か月の猶予

いったいなんだったのだろう・・・
僕は自分の身に起こった出来事を、まだ理解できていなかった。
挑戦・・・
父のナンバーを奪った者への挑戦・・・それが意味するもの・・・
復讐・・・・・・
「復讐？」
僕は自分の中に芽生えた感情に疑念をもった・・・
僕は何も恨んでは無い・・・ランカーの敗北、そして脱落、それは
この世界のルール、誰も異を唱えなどしない。
では何のための挑戦・・・夢への一歩・・・
「夢」
そう、それは紛れもなく幼き日からの夢・・・
決して叶わないと思っていた夢。
だが、今叶うかもしれない夢。
「なぜ迷っている？」
夢が叶おうという時になぜ迷う・・・
わからない・・・迷う理由なんて。
自分のことがわからなくなっていく。
夢がわからなくなっていく。
全てがわからなくなっていく。
そんな状況の中、時は刻々と進んでいく。

僕はいつしか、時という感覚を失いつつあった。
あれから何日経ったのだろうか。
あと何日残っているのだろうか。
そんな疑問を持ちつつも、僕はすべての答えを見いだせずにいた。
何のために考えるのかそれさえも分からずに時を過ごしていた。

バンバンと家のドアを乱暴に叩く音がする・・・
「アグルいるのか？　いるなら開けてくれ」
声の主はマイルであることはすぐにわかった。
鍵はかかっていない、入ろうと思えば入れるはずだ。
ドスッという音とともに、木片が床に落ちる音がした。
だけど、今はそんなことは気にならなかった。
「アグルっどうした！」
マイルが驚いたような声問いかけてくる。
僕は、マイルにありのままを話すべきか迷った。
マイルもまた、ランカーを夢見ていたからであった。
僕だけ権利とかいうものでランカーになれるかもしれないなんて、
裏切りのようで言いずらい。
「アグルなんで答えないんだよ！」
マイルはなぜか悲しい表情をしている。
「何があったんだよ教えてくれよ・・・」
マイルはうつむいて黙り込んでしまった。
僕はそれを直視することができなかった。
しばらくしてからマイルが再び口を開いた
「なんで教えてくれないんだ、俺達友達だろ。」
僕はその言葉に自分の考えていたことが馬鹿馬鹿しくなった。
そしてすべてを話した。
話終えるとマイルはすぐに口を開いた
「なにも迷わなくていいだろ、行ってこいよ、負けた時は俺が許さないけどな。」
マイルは、僕がいくら考えてもわからなかったことを、それだけで解決させた。
僕は、マイルの言葉で何か吹っ切れた気がした。
「ありがとう」
僕はそう言い放った。

「え？」
マイルは何かお礼を言われたことが意外だったらしく間の抜けた顔になっている。
その後マイルは薄ら笑みを浮かべて
「またなっ。」
と言い放ち走って帰ってしまった。
僕はふと思い出した。
「ドア壊れてる・・・」
マイルはドアを破って入ってきたことを僕はこのときまで忘れていた。
僕は「あの野郎覚えとけ！」とつぶやきながらも。
心の中は何か穏やかな気持ちだった。

3、一か月の猶予（後書き）

作者が変人なのでわかりにくいところもあると思いますが、そのところは大目に見てください。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8991c/

Ｎｏ，

2010年12月21日19時37分発行